
ゲノムの縛鎖

太田燕雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲノムの縛鎖

【Nコード】

N4379C

【作者名】

太田燕雀

【あらすじ】

医師を目指し、医科大学へ進学した秋山俊也。そこで出会ったのは年上の同級、神崎美紗だった。彼女が医大に進学した理由、その人柄に奔放されながら、やがて悲しい結末を迎える俊也。美紗とは、いったいどんな女性なのか…。

医科大学へ

春を告げる暖かい風。目に見えない空気の存在が肌で感じられて、心は高揚している。ことに今年の空気は祝福のオーラを帯びて、えもいわれぬ幸福感を感じさせた。

医大を受験する、と告げたときの両親の顔は、いまだ脳細胞が写真のネガのように焼き付けて離さないでいる。高校は都内でも優秀と賞される私立の進学校で、成績も”中の上”レベルを3年間維持した。だから両親も医大を目指すに不足とは思っていなかっただろうが、なにかしら医学というものの神聖性というか、医師というものに対する畏敬の念というか、そういうものを脳裏に交差させているような、なんともいえない表情を見せたものだった（高校も口々に卒業できなかつた自分たちの息子が！？というトンビがタカを：的な念も大いにあつたであろうが）。最終的には両親は物心ともに最大の応援をしてくれ、自分も最大の努力、実力を駆使し、見事現役での国立医大合格を遂げた。

そもそも、なぜ僕が医大を選択したのか、経緯を語るとしたら、3年前、高校入学直後に経験した悲しい出来事から話さなければならぬ。我が家からそう遠くない場所に、小学校時代の恩師が引越してきた。世話になつた当初で確か29歳だと言つていた女性教師で、容姿は特に良くも悪くもない、どちらかといえば目立たないタイプだったが、生徒に対していつも真摯に、暖かく接してくれ、生徒からもほかの教師からも評判の良い先生だった。引越してきたことを知らなかつた僕は、その先生と近所を歩いているときにばつたりと出会つた。彼女は大きなお腹をかかえながら、タクシーに乗り込もうとしているところだった。僕はすぐに彼女のことを思い出し、「有坂先生、ですか？」と声をかけた。ふいに声をかけられて少し驚き気味な表情をして、彼女は振り返つたが、数年前の教え

子であることは当然すぐには思い出せず、少し怪訝な面持ちをしていた彼女に、「お久しぶりです、先生。秋山です」と名乗った。彼女は小さく、あきやま、と呟くと、突然まばゆいような明るい表情で、僕を見直した。

「秋山くん！生徒会で副会長だった、秋山俊也くんよね！」

記憶のフラッシュバックから戻ってきた先生は、少しイライラした表情のタクシー運転手のことなんかすっかり放り出して、僕の手を握って再会を喜んでくれた。

「こちらに引越してこられたんですね。もう少し近ければ気づいていたかもしれませんでしたね」

「本当、秋山くんの家がこのあたりだってことは覚えていたんだけど、なかなか挨拶にうかがえなくて……ごめんなさいね」

先生はもう三十を過ぎてはいるはずだが、むしろ小学校時代より艶やかになって、若く見えた。

「いいんですよ。こうやって偶然再会するのも悪くないです。それより、タクシーを待たせているし、つもる話はまた今度ということにしませんか？病院に行かれるんですね？」

僕がそういいながら先生の大きなお腹に視線を落とすと、少し照れたようにお腹をさすって微笑んだ。

「もうすぐ産まれるの。だから診察と、入院の手続きをしに行くの。そうね、ゆっくり時間を取って、またお話ししましょう。その頃には、この子も産まれてるわね。じゃあ、楽しみにしてるわ」

そう言って先生がタクシーに乗り込むと、せわしなく走り去っていった。僕は幸せを分けてもらったような幸福感に満たされ、先生とまた話せる時を楽しみに待った。

それから先生とまた再会したのは、1ヶ月ほど経過した頃だった。先生からうちへ電話があり、無事出産と退院したということを告げ、次の日曜日に会えないか、という打診だった。僕もそれに異議なく承諾した。

指定された喫茶店に入ると、先生はすでに席について産まれたばかりの我が子をあやしていた。まるで言葉が通じているかのよう、ささやくように話しかけ、頷く様は、生命の神秘と母子の愛情のオーラに包まれ、ひと時僕を魅了した。

「あ、秋山くん、こっちよ」

僕の来訪に気づいた先生は、大きく手を振って迎え入れた。

「こんにちは。無事ご出産されたみたいですね。おめでとうござい
ます」

先生は少し照れるような仕草をしながら、深々と頭を下げた。

「ありがとう。三十過ぎた身体で、初産だったものだから、難産だったのよ。最終的には、母子の生命のために、帝王切開ということになったの。でも、とにかく無事に産まれてきたから、私は今、幸せでいっぱいよ」

母親の言葉が理解できたのか、母の胸で、子は嬉々とした表情で小さな両手を振った。

「私、本当は子供は諦めていたの。教育現場で働くことで、躰や教育の難しさを知ってしまったし、なによりこの歳で健康な子供を無事産めるのかどうかという心配もあったしね」

我が子に慈しみの視線をささげながら、過去の夢物語を語った。

その不安が杞憂であり、今ここに生命誕生の喜びを得たという幸福感が、僕には胸に刺さるほど伝わった。

先生とこうして小学校時代のつもる話すと、暖かい家庭を持てる幸せについて色々と話し合って、二時間が経過した。教師と生徒、ほんの二、三年間の思い出話だが、永久に尽きることもなく言葉は交わされた。ときにはその当初にタイムスリップするように、まるで精神だけがその時代に戻ったかのように、記憶がタイムマシーンに乗って行ったように。尽きることもない二人の会話は続いた。

「秋山くんは、もう高校生なのよね。学生としての進路でなく、人生の進路を、そろそろ考える頃かしらね」

現実世界に引き戻すような先生の言葉に、僕は言葉をつぐんでし

まった。まだ高校に入学したという事実には浮かれて、そんな大層なことまで考えが及んでいなかった。

「人生の進路なんて。まだ今のことで精一杯ですよ。ただ、その進路が決定して、実現できるだけの学力を付け、維持しようという意欲はあります」

先生は僕の返答に納得したように頷き、

「秋山くんは何にでもなれるわ。わたしが保証する。早くその目標が見つけれればいいわね」

あの頃と変わらない、生徒に対する真摯な答えだった。先生に対する感謝の念が、さらに深まった一言だった。

消える命

それ以来、有坂先生（現在は高島という姓だ）との交流は続いた。母の実家から採れたての野菜が届いたときは、それをおすそ分けしたり、先生も我が家に愛息を連れて母と歓談したりした。遼、と名づけられた赤ちゃんは、愛嬌いっぱい元気いっぱい、見ている僕たちもとても癒された。

「この子はしあわせだね。こんなに大切にしてもらって…」

愛する我が子を胸に抱き、慈しみの視線を向ける先生は、まるで聖母のようで、母親の愛情の深さを感じさせた。

そんな幸福な時間を打ち砕く事態は、床に就こうという深夜に起こった。けたたましく鳴る電話を取った僕は、聞こえてくる声に戦慄を覚えた。声の主は、有坂先生だった。

「遼が！遼が！」

狂わんばかりに金切り声をあげる先生。僕は頭の中を整理しながら、冷静に声をかけた。

「先生、落ち着いて。遼くんになにがあったんですか」

荒げる息を飲み込むようにして、先生は事情を話した。ベッドに寝かせようとした際、遼くんが身体をよじった瞬間に手が離れ、ベッドの上に落としてしまったのだという。そう高くない所からだったにもかかわらず、遼くんはうつぶせのまま身体を痙攣させはじめたというのだ。

「救急車は呼びましたか」

「呼んだわ。でも、まだ来ないの。ああ、遼ちゃん…」

先生は完全に錯乱してしまっている。ご主人は長期の出張でおられないし、先生一人では事態の收拾は不可能だろう。

「先生、待っててください。僕が行きます」

投げ出すように電話を切ると、僕は寝巻きのまま外へ飛び出した。

走れば数分の距離だ。

先生宅の玄関には鍵がかかっていた。僕は躊躇もせず、叫び声の聞こえる部屋に飛び込んだ。

「先生！」

そこには、視線も定まらず錯乱する先生と、小刻みに身体を痙攣させ、あの愛嬌たっぷりだった表情も見ると影を無くしてしまった遼くんがいた。

「落ち着いて、先生。もう救急車が来るはずですよ」

慌てて来てみたものの、自分にできることといえば先生を励ますことだけだった。遼くんはうつぶせの状態でベッドに落ちたのだという。産まれてまもない弱い身体だ。小さな衝撃だったとしても、心臓にダメージを与えたに違いなかった。程なくして救急隊が到着、遼くんの状態を見た隊員は、心室細動の疑いがある、と無線を送って、遼くんを抱きかかえ、救急車に乗り込んだ。

「お母さん、落ち着いて。車内で電気マッサージを施します。これは心臓の細動を除去して、正常な状態に戻すための処置ですよ」

我が子に電気ショックを与える、ということは、例えば医療行為であっても、母親からしてみれば我が身の苦しみ以上の痛みを感じるのだらう。青ざめた表情で、それでも先生は、「お願いします」を繰り返していた。僕は足元を震わせた先生を抱きかかえるようにして救急車に乗り込んだ。

ひと時の安堵を得て、先生も随分落ちついてきた。しかし、悪夢はそれで終わらなかった。収容する病院が見つからないというのだ。近在の病院は当直の医師が専門外だからという理由で断ったという。次に連絡をとった病院はベッドが満席だとか、そんなことを言うのだという。救急隊員にもあせりの色が見え始め、敏感にそれを察した先生はまた狂気の虜になった。

「病院は、病院はまだ見つからないんですか！」

「お母さん、落ち着いて、今全力で收容先を探しています。大丈夫、間に合いますから」

僕には、隊員その言葉が一時しのぎの言葉にしか聞こえなかった。明らかに遼くんは命の灯火は弱くなりはじめている。応急処置の電気マッサージだけでは細動が止まらないのか、それとも他にも治療が必要な病状があるのか。医学的知識に乏しい僕にはなにもわからず、錯乱する先生を励ますことしかできなかった。

どれくらい時間が経ったのだろう。ようやく見つかった收容先の病院に到着した頃には、遼くんの顔は土気色を帯び始めていた。集中治療室に運ばれてゆく遼くん。あとは医師にまかせるしかない。僕はひたすら無事を祈った。

それからは時間の感覚も、聞こえていた治療室の医師達の声も感じなくなった。空が白み始めた頃、治療室から出てきた医師は、厳粛に重い口を開いた。

「午前五時三十四分、永眠されました」

先生の顔にはもはや生気がなく、すべての事実から逃避してしまっている。明るく優しくにあふれていたあの頃の面影はなく、糸の切れたマリオネットのように、力なく病院の冷たい床に崩れ落ちた。

悲しみからの出発、そして出会い

遼くんの通夜。出張先から戻った先生のご主人は、やはり狂ったようにもだえ泣き叫んでいた。そして、仕事の都合とはいえ、産まれてからほとんど一緒にいてやれなかったということに罪の意識を感じているという心のうちを吐露しつづけた。ごめん、ごめん、ごめん、ごめん。先生も、憔悴し、魂が抜けきってしまったように、涙すら流さず、どこを見てもなく空ろな瞳をしていた。僕には声をかけることすらできない。ついこの間まで間近で見ていた遼くんの可愛らしい笑顔は、無機質な遺影の中でしか見られない。至上の幸福は一転、出口の見つからない漆黒の闇に突き落とされた。祭壇に手を合わせ、先生夫婦に頭を下げると、ご主人が「君には世話になったようだね。ありがとう」と腫れあがった目を隠すようにして頭を下げた。あのとときの僕は無力だった。医学的知識が少しでもあれば、救急車の到着までに応急処置を施せたかもしれない。それは考えても仕方ないことだということにはわかっている。自分はただの高校生。命を救う力などありはしない。だから。だから僕はその力を欲した。医師になる。もう戻っては来ない遼くんに誓った。君のように短い生涯を閉じようとする子供を救うために、全力を尽くす、と。

入学式を終え、大学の講義が始まった。ここには未来の医療を支える人たちが集まっている。講義を受ける姿勢も、皆真剣そのものだ。一限の講義が短く感じられるくらい集中して、講師の一言一句も漏らさずノートに書き込む。それが頭の中で反芻され、理解できた瞬間は、快感とも呼べる境涯だ。

一日の講義が全て終了して、正門まで歩いてきたとき、ふいに女性性の声に呼び止められた。

「こんにちは」

振り返ると、声の主は微笑みを浮かべながら立っていた。清楚な感じの女の子、いや、僕より年上に見える。何年かの浪人を経て入学したのかもしれない。

「同じ講義を受けてたでしょ？ほら、橋本教授の」

「あ、ああ。受けたよ…。でも、どうして」

見知らぬ僕になぜ声をかけてきたのか、と聞こうとすると、僕が言い終わるまでに彼女は答えた。「理由？どうしてかしらね」いたずらっぽく笑うと、すっ、と僕の隣に立った。

「私、神崎美紗。きつとあなたより年上だけど、同級のものよしみで仲良くしてやってくださいな」

「あ、ええと。僕は秋山俊也。よろしく」

彼女のあまりにも自然な接し方に戸惑い、少しうわずり気味に自己紹介した。

「ねえ、これから時間ある？飲みに行かない？」

「え、と。僕、未成年だし」

戸惑いながら答えると、美紗さんは驚いた表情で、「あなた現役なんだ。すごいじゃん」と言っ僕腕に華奢な腕をからませてきた。異性とこれほど近接した経験はほとんどなかった僕は、鼓動の高まりを抑えることができず、頭に血が上る感覚がした。

「私は三浪して、ようやく入れたの、ここ。一度社会に出てからのチャレンジだったから、頭の中を学生モードに戻すのに苦労したわで、二十四歳にして晴れて合格したの」

「へえ、それってある意味、現役合格よりすごいんじゃないですか」

「まあ、嬉しい。最高のほめ言葉だわ」

僕の腕に絡まった細い腕に力が入った。同時に感じた柔らかいものが当たる感覚に、我にかえった僕は彼女の腕を振り解いた。

「あ、ご、ごめんなさい」

「敬語なんて使わなくていいわよ。それより、こっちこそごめんね。馴れ馴れしいわよね、私」

そう言いながら、自分の頭をコツン、とやる仕草は、自分よりも年上だとは思わせない、イノセントな少女の姿だった。

「お酒が駄目なら、お茶でもしましょうよ。あなたのこと、もっと知りたいの」

結局、彼女のペースに流されながら、大学から程近いカフェに入った。彼女が僕のどこに好奇心を抱いたのか、今もって謎だが、僕も悪い気がせず、ただ引つ張っていかれるに任せていた。

カフェに入っても、饒舌な彼女の勢いは止まらなかった。新鮮な大学生生活、高校時代の話、僕には何の関係もない、友達の話。堰を切ったように言葉が出続ける。僕はただ頷いて聞くことしか許されていない。

「ねえ、あなたは どうして医大を受けたの？」

一転、真剣なまなざしで僕に問いかけてきた。その理由を思い出すと、遼くんの幼い顔がフラッシュバックした。僕は訥々と過去を話した。

「そう。つらい思い出ね。全体的に医師不足であることはよく耳にしてる。特に産科と小児科は深刻な医師不足なんだってね。受けられる病院がなくて、救急車の中で息を引き取る人がいるってことも聞いたことがあるわ。医師を目指すものとしては、どうしても何とかがしたいって気になるわね」

「じゃあ、美紗さんも、同じような理由があるの？一度社会人になつてから医大を目指すなんて、よほどの理由があるんでしょう？」

僕が切り出すと、気のせいかな、美紗さんは視線を遠くに移し、悲しげな表情に見えた。

「ええ。私には目的があるの。でも、あなたみたいな高尚な目的じゃないわ。私の目的は、私のためだけ……」

そこまで言うと、ティーカップを揺らしながら、相変わらず遠くを見つめるような目で、それきり黙り込んでしまった。

「今日はありがとう。無理やり付き合わせちゃってごめんね」

「ううん。友達ができて僕も嬉しいよ。もう暗くなってきたし、家まで送ろうか？」

僕の申し出に、美紗さんは小さく首を振った。

「これからバイトなの。一人暮らしの浪人上がりは、けっこう忙しいのよ」

そう言っつて悪戯っぽく笑うと、また明日、と振り向きながら手を振って、駅へ向かって歩いて行った。結局、僕には美紗さんのことは半分も理解できないままだ。無防備に僕の懐に飛び込んできて、オープンに話しあつて、それでもなお、美紗さんには見えない部分があつた。明るい言動には、なにか影があるような。その影にさえぎられて見えなかったものは、いったい何なのだろう。帰路に歩く道すがら、ずっとそんなことを考えて歩いた。

キャンパス・ライフ

よく言えば天真爛漫な美紗さんは、それからというもの、僕を見つけては声をかけ、隣の席に座った。席について講義が始まるまでの数分間は、相変わらずよくしゃべる。アルバイトでこんなことがあったとか、今朝の朝食がどうとか、とにかく頭の中に浮かんだ単語を全て吐き出さないと気がすまないらしい。そんな彼女でも、僕は少しも嫌気が起きない。なぜだかそんな会話の内容でも、楽しいのだ。僕は口が重いほうだから、あまりこちらから話題を振ることはない。だから美紗さんも気兼ねなく(?)まくしたてる。僕はただ相槌をうっているだけだ。

ところが、講義が始まるとそんな雰囲気は激変する。怖いくらい目を見開き、速記のようなスピードでメモを取り、聞き逃したときは遠慮なく「もう一度お願いします」と講師に声をかける。質問する回数もずば抜けて多く、かえって講師のほうが対応に追われているくらいだ。講義はまだ医学の初段階なのに、鬼気迫るその言動には、ただただ圧倒された。

「美紗さんって、本当にすごいね。圧倒されるよ」

一緒にランチをしながら、思わず口をついてでてしまった。これは本心であり、決してお世辞や大げさではなかった。

「そう? 私はただ、どんな知識でも正確に深く記憶したいだけ。そのためなら誰にも遠慮はしないつもりよ」

「周囲にいる僕たちは、それで助かっている部分もあるよ。理解しがたい内容があったとき、僕なら一人で咀嚼しようと無駄な努力をしたとおもっ。でも美紗さんがズバリ質問してくれて、納得するまでがんばってくれるから」

美紗さんはクスッと笑って、レモンティーをすすった。

「講師には嫌われちゃうかもね。仕事を増やさないでくれたまえ」

って」

僕たちは顔をあわせ、アハハ、と笑った。始まったばかりの大学生活は、美紗さんのおかげで何のストレスもなく楽しく進んでいる。未だに僕に声をかけてきた理由は不明だけど、もう理由なんてどうでもいい。こうして出会うきっかけができた、その事実だけでいいとおもった。

「ねえ、俊也くんはバイトしてないの？」

店を出たところで、ふいに聞かれた。

「ああ、もう少し落ち着いたら探そうとおもってたんだけど」

「そう。いい仕事があるんだけど、どうかしら。私がまだ浪人中から続けているバイトでね、今、人手不足なのよ。俊也くんならきつとできるとおもうんだけど」

「どんなバイト？」

「会社はベンチャーなんだけど、結構規模は大きいわ。遺伝子工学で医薬品やエイズ治療薬の開発を主にやっていて、アメリカの大手医療企業とのコネクションもあるし、将来有望なのよね」

遺伝子工学からの医療ベンチャーが増えていることは聞いたことがあった。大学の研究室などにもつながりがあって、成功している会社は結構多いということだ。

「遺伝子工学か。医大生としては興味ある分野だね。仕事の内容は？」

「実験の補助と、分析資料の作成、整理。難しくはないの。事務的な作業がほとんどだから」

これからの医療を考えれば、遺伝子工学は避けて通れない分野だ。多少なりと知識が得られれば、決して損はない。

「いいね。じゃあ紹介してよ。講義が集中している時期は難しいかもしれないけど、それでもよければ」

「よかった。俊也くんなら了承してくれるとおもったわ。大丈夫、私だって講義の合間に通ってるんだもの、うまくいくわよ」

こんなにも何かも順風満帆に事が進むことがあるんだな、と少し驚いた。現役での大学合格、気さくな友達の出現、有望な会社でのアルバイト。勉強も順調にすすんでいる。特に美紗さんと出会ってからの毎日は、とても充実していた。彼女本人がどういう気なのかはわからないけど、僕には感謝せずにはられないことばかりだ。

大学生活が始まって一ヶ月が経過した。上級生からの歓迎ムードも落ち着き、それぞれが思い思いの生活を楽しんでいる。美紗さん以外にも何人か友人ができた。北海道からこの大学を受けてきた児島正樹。一浪で入学した持田圭一さん。父親が開業医だという麻宮加奈。僕たちはまるでグループ交際みたいに、いつも一緒に行動した。話題を提供するのはもちろん美紗さん。児島はノリのいいやつで、それをさらに盛り立てる。おとなしめの持田さんはそれを見てあっけにとられ、加奈ちゃんはただただ大笑いしている。高校でもこれだけ親密な友人はいなかったかもしれない。僕の青春は今なんだ、と思った。

しかし、勉学のこととなると、皆真剣で優秀だった。わからないこと、足りない知識は互いに補完しあった。ときには勉強会なんてものも開いて、医師を目指すもの同士の結束は固かった。

アルバイトのほうも、仕事の流れがようやくやく掴めて、美紗さんに助けられながらも、うまくこなしていた。時給も驚くほど高く、両親の負担を少しでも軽くしてあげられそうだった。

美紗さんは遺伝子工学に関しても相当知識があるらしく、実験の補助をしているときも、難しい専門用語を話し、実験用機器も、まるで専門家のように扱っている。研究員からも信頼されているようだ。

「美紗さんって、こっちの分野でも成功できるんじゃないの？」

休憩の合間、僕は少し冗談まじりに言った。

「そうかしら。そうだといいわね。医師免許を取ったらこつち系の大学に入って、遺伝子治療の第一人者になるっていうのも悪くないしね」

「そうだね。そうなら僕も助手として使ってもらおうかな」

「そう言うと美紗さんは微笑みながら、

「助手ねえ。なんなら、伴侶にしてあげてもいいのよ?」

僕は飲んでいたコーヒーを吹き出しそうになった。それを見て美紗さんは大笑い。僕は口元を拭きながら、まだ続いている胸の高鳴りを、恥ずかしまぎれに必死に抑えようとした。

男と女

美紗さんと過ごすキャンパス・ライフも、随分と波に乗り、医師を目指すという意思も固まってきた。美紗さんは洞察力に長けていて、しばしば僕の間違いを正してくれた。友人は何人かできたけれども、やはり一緒の時間が長いのは美紗さんだった。

夏期休暇まであと二週間となった頃、美紗さんは僕を飲み屋へ誘った。未成年だからと断ると、アルコールを摂らなければいいじゃない、私の話に付き合つてよ、と半ば強引に連れられた。もちろん、居酒屋なんて初めてだった。

父が酒好きだったから、酒飲みに囲まれる雰囲気慣れるのはその時間のかかることじゃなかった。酩酊している人間は、個々の性格とはあまり関係なく、それに縁のない僕からすれば、同じような人間にしか見えなかった。美紗さんは酒に強いらしく、料理が運ばれてくる前にジョッキのビールを二杯飲み干していた。未成年の僕に対して、酒に関するレクチャーまでしてくれて、嬉しいやら面倒やら、僕は苦笑いするしかなかった。

「まあ、今は未成年とはいえ、大学生になったらこれから、こういう付き合いは増えるわよ。雰囲気慣れておくだけでも損はないとおもつよ」

美紗さんの言うことは正論だろう。大学生といえばコンパ、みたいなイメージは僕みたいな控えめな人間だって持っている。コンパなんてものには興味ないけれど、大人の社交的行為のひとつとしては認識と知識が多少無くては困るかもしれない。

「ええ。色々のご指導ください、美紗先生」

「冗談まじりにそう言つと、美紗さんはさらにテンションと酒のペースを上げてしまった」。

二時間ほど経過しても、美紗さんはあまり変化を見せなかった。

饒舌さも、テンションの度合いも、普段とさほどかわらない。変わったことといえは少し下ネタが増えてきたことだろう。僕より年上だし、男性経験もそれなりにあるだろうから、僕はあえて冷静に聞く立場を変えなかった。僕だって性行為には興味ある。童貞だからじゃなく、本能だとおもう。でも、美紗さんの下ネタが少しずつりアリテイを帯びてきたところから、僕は理性との戦いを始めた。彼女のエロ話に出てくる男性は今のところ一人だけ。ただ、その行為に関する形容詞は、僕には過激すぎた。隣りの席の男性客は、怪訝で淫猥な視線で美紗さんを睨んだ。諫めようとおもうが、すでに美紗さんは聞く耳を失っている。

「何よ。これしきの話でうるたえちゃって。そんなことで私を満足させられると思っているの？」

周囲に誤解されかねない発言に、ついに耐えられなくなって店を出た。支払いは当然、僕が済ませた。

「飲みすぎだよ、美紗さん」

ふらつく足元が心配で支えながら声をかける。美紗さんは呂律の回らない口でなにかしゃべっている。

「やれやれ。酒には強いとおもっただけで、それでもなかったんだね」

「なによ。私がザルみたいな女だと思ってたっていうの？」

すでに絡み酒だ。

「とにかく、家まで送っていくから、住所を教えて。タクシー拾うから」

ブツブツと文句を言いながら、住所とアパートの名前だけ告げると、うとうとと眠りだした。

「ほら、部屋に着いたよ。起きて、美紗さん」

泥酔した人間の重みは、実際の30%ほど上乘せに感じるものだな、とくだらないことを考えながら（実際の体重はもちろん知らない）、夢うつつの美紗さんから、部屋の鍵を受け取った。

部屋に入ると、手探りに部屋の明かりを点けた。女性らしい小奇麗な部屋で、特筆すべきところはないが清潔な部屋だった。シングルベッドに美紗さんを横たわせると、何気なく部屋を見渡した。ぬいぐるみだとか、アイドルのポスターだとか、およそ自分の中で女の子の部屋というイメージのものは一切なかった。たくさんの参考書や専門誌があるだけで、純粹に医師を目指す一人の女性の部屋だという印象だ。

ひとつ気になったのは、美紗さんと仲良くツーショットで写っている男性の写真が写真盾に入れて置かれていることだった。美紗さんは容姿も良いし、恋人が何人いようが不思議ではないのだが、僕には何か違う雰囲気を感じられたのだ。例えていうと、まるで夫婦のような近親感だろうか。

「う…ん…」

ベッドで気持ちよさそうに、美紗さんは寝返りを打った。口元にうつすら笑みを浮かべたような寝顔は、とても可愛らしかった。無理性との戦いもむなし、僕は美紗さんの唇を指でなぞり、自分の唇を重ねた。

彼女の気持ち、僕の罪

女性の身体は精神を爆発的に覚醒させる媚薬なのだろうか。美紗さんをベッドに寝かせて部屋を出て、どこをどう歩いたかも不確かな状態で、電車に乗ったり降りたりしたとき以外の記憶は薄い。気づいたときは自分の部屋だった。

ベッドに横たわる。自分がしたことを思い出す。すぐに犯すべからざる行為をしたと、悔恨の念が猛然と湧き起こる。美紗さんの唇に自分の唇が重なった感覚が、まるで焼きついてしまったかのように鮮明に残っている。僕は美紗さんが好きなのか？いつから？知り合ってたまだ一ヶ月ほどの時間しか経過していないのに。一緒に講義を受け、気の置けない仲間とはしゃいで、ただそれだけの一ヶ月で、美紗さんが気づかぬうちに僕の心の一部になってしまった。昔から惚れやすいことは自分でわかっていたけれど、それを美紗さんが知ったらどうおもうだろう。「そんな簡単に好きになれるの？」と軽蔑されるかもしれない。悔恨の念と美紗さんへの想いが全身の神経を輪廻して渦巻いている。

いつの間にか寝てしまったようだ。何度も寝返りを繰り返したらしく、ベッドのシーツは原型を留めていない。まだ空は白みかける時間だったが、睡眠欲はこれ以上起きそうもない。重くだるい身体を起こし、窓を開けた。

冷たく澄んだ外気をおもいきり吸い込むと、すこし頭が冷静になったきがした。美紗さんが昨夜のことを覚えていようといまいと、自分の気持ちを伝えよう。どのような結果がおとずれようと受け容れなければならぬ。覚悟が定まると、もうじつとしていれらなかつた。シャワーを浴び、朝食も摂らずに家を出た。

好きなんだ。やっぱり。無邪気で、陽の光のように暖かな明るさ。

時間なんて関係ない。ひまわりの花が太陽の光に向くようなもの。僕には美紗さんが必要だから、僕の中の『心』が欲した。まるで詩人みたいな発想だけど、こんなふうにししか説明がつかない。自分を納得させることができない。

通学途中の風景は、いつもと何ら変わりはない。違うのは、押し隠されていた昨日までの僕の心と、空を漂う雲の形だけ。考えてみれば、僕は進学のために、わき目も振らず勉強してきた。こんな風に空を眺めることすらしなかった。自分にプレッシャーを与え、苦しくてもだえたくなくなるようなときは、いつもあの愛らしい遼くんのことを思い出した。僕には使命がある。この苦しみに耐えれば、きっと救える命がある。その一心でここまで来た。くよくよなんかしていられない。美紗さんには正直な気持ちを伝え、結果がどうなるうが、僕は医師の道を進んでゆこう。

キャンパスの自動販売機でブラックコーヒーを買い、少し冷たいベンチに腰掛けた。暖かいコーヒー缶と冷たいベンチの感覚が、同時に脳を突き抜ける。人間の神経経路の複雑さは、どんな優秀なコンピュータでも追従できまい。感覚によって感情も変わる。頭の中のモヤモヤが晴れて、めいっぱい息を吸って、コーヒーのプルタブを掻き開ける。苦くて麗しい香りが漂う。天を仰ぐようにコーヒーを飲んだ。

「おはよう」

聞きなれた声が、僕の隣から風につてきた。いつもどおりのトーンだ。

「あ、おはよう」

一晩悩みぬいたのが馬鹿馬鹿しいくらい、普通の再会だった。美紗さんの手には、ホットミルクティーの缶。

「昨日はごめんね。うちまで送ってもらっちゃって」

そのトーンからは、疑念や軽蔑の色はうかがえなかった。カシヤ、とプルタブを起こすと、ぐいっと一飲みして、あちち、なんて言う。

いつもの無邪気さはなんら変わっていない。

「こつちこそごめん。なんか勝手に部屋に入っちゃって」

「なに言ってるんの。私、自分で鍵を渡したでしょ？あなたが勝手に鍵を奪って入ったんじゃないって、記憶してるんだけど」

「それはそうだけど」

僕は残ったコーヒを飲み干すと、大きなため息をひとつついた。

「もしかして、部屋に入っただけくらいで罪悪感を持っているわけ？」

「だって」

「だって、じゃないよ。酔っ払いの私を担いで、ベッドまで運んでくれたんでしょ？重かったでしょ、私。先月より2キロも太っちゃったんだもん。罪悪感を持つてるのは私のほうなんだから」

僕は救われたのだろうか。美紗さんの言葉には、まるで嫌味が無い。むしろ僕のほうがいぶかるところだ。

「知り合って間もない男が部屋に入って、美紗さんはイヤじゃないの？」

僕が言うと、今度は美紗さんがいぶかった。

「私たちって、そんなに浅い仲だったのかしら。時間なんて関係あるの？」

僕には返答することができなかった。朝の澄んだ風が、どこからか小鳥のさえずりを運んできた。僕は美紗さんが好きだ。その気持ちだけを伝えれば、この問題は解決するのかもしれない。ただ、やっぱり土壇場で、その勇気が出ないのだった。

「キスしたことに罪悪感があるんじゃない？ね？そうでしょ？」

いたずらっぽく美紗さんは核心を突くことを言った。言い返す言葉もない。凶星なのだから。胸がうずいた。

うつむこうとした僕の顔を、暖かい手のひらが包んだ。そして、昨晚とおなじ唇の感触が伝わってきた。とても長い時間。どちらかが離れることもなく、長い、長いキスだった。やがて、美紗さんの唇が離れていった。僕の鼻腔には、かすかにミルクティーの香りが残っている。

「これでわかったでしょ？私の気持ち」

それだけ言うと、美紗さんは空になった僕のコーヒー缶を持って、自動販売機によこのゴミ箱のほうへ走っていった。カラン、カラン、と、空き缶同士がぶつかる音がする。美紗さんはそのまま校舎のほうへ走っていった。カラン、カラン。まるで神社の鈴を鳴らしたような音だった。

迷宮からの脱出

本日、朝一番の基礎医学講習から、僕は心ここにあらずで、魂の芯が抜け落ちたような感覚だった。昨夜一晩、僕は何を考えていたのだろう。美沙さんに対する僕の気持ちは間違いなく恋愛の感情だったわけで、美沙さんはそれを受け容れてくれた。というより、かつてに僕が罪悪感にしまっただけであって、素直で率直な決意のなかった僕の背中を、美沙さんは軽く押ししてくれたわけで…。隣の席にいる美沙さんは、あいも変わらず講師いじめ（？）たる質問の嵐を巻き起こしている。いつもなら鬼気迫るその発言に圧倒されているだけなのだが、なんだか今日は小鳥のさえずりのように聞こえる。なんて単純なやつだ、僕は。精神医学の講義に入ったら是非とも研究内容にしてみたい。単純な「男心」ってやつを。

講義が終わったあと、いつもと変わらぬ様子で僕と話す美沙さんに、僕はどうしても確認しておきたいことがあった。

「ねえ美沙さん。今朝のことなんだけど」

「うん？」

まるで朝の出来事を忘れていたかのように視線を合わせてくる。

裏表のない、澄んだ瞳。

「あれって、僕とその…お付き合いしてもいいってことだと思っ
ていいのかな？」

しどろもどろに小声で話す僕に、美沙さんは軽くコッソン、と僕の額におみまいした。

「俊也くん、私にもう一度あんな恥ずかしいセリフをいわせたいわけ？」

少しふくれっ面をして頬を赤らめている。僕が対応に困っている
と、

「俊也くんに足りないのは、自信ね。もっと自分に自信を持ってよ。」

僕にはこんな可愛いカノジョがいるんだぞ〜って」

自分で言っておきながら、頬はますます紅潮してゆく。僕はまた、美沙さんに悪いことをしてしまった。女性にここまで言わせてしまった自分が情けなかった。

「ごめん。なんかさ、確約できるものが欲しくて…」

「うーん。私が軽すぎるのかしら？それとも俊也くんが鈍感なのかしら？」

美沙さんは真剣に考え始めた。おおげさにウロウロと歩きながら首をかしげる。やがて動作を止めると、クスツと笑って僕の手を引っ張った。

「ちよつとこつちに来て」

カバンを机に置いたまま、僕は廊下まで引っ張りだされた。そこには次の講義のために移動する人、雑談を交わす人たちが大勢いた。今から何がはじまるのかわからない。僕は手を引かれるままに、廊下の真ん中まで来た。美沙さんは大きく息を吸い込んで、僕に一瞥すると、

「みなさーん、注目してー！」

今まで聴いたことがないくらいの大声を上げたかとおもつと、次の瞬間、今朝とおなじ柔らかな感触が僕の唇に重なった。予想不可能な美沙さんの行動に僕はなすすべもない。廊下にたむろしていた人たちは声のひとつもあげない。どれくらいの時間が経ったかわからない。きつとほんの数秒の出来事だったのだろうとおもうけれど、しばらくして唇の感触は離れてゆき、またしても美沙さんに手を引かれて走り出した。人気の少ない場所までくると、美沙さんは荒れた息を整えながら、笑い声を発していた。

「あー、スツキリした」

なにがどうなったのか、僕が理解するには、もうしばらくかかるかもしれない。

「どう？これで俊也くんは私のカレシに確定したかしら？」

あどけない笑みでこちらを見られると、僕もなんだか急に可笑し

くなってきた。お腹から笑い声が湧き出してきた。ひと時笑い続けると、僕は自分から美沙さんの手を引き寄せた。

「ここまでしてくれるとは思わなかったよ。ごめんね、鈍感な男で」
彼女の瞳は優しい光を帯びて僕を見つめた。

「いいのよ。私はこういうやり方でしか気持ちを伝えられない不器用な女。あなたはここまでしないと分からない鈍感な男。そういうことなのよ、きつと」

また可笑しくなってきた。モヤモヤと考える性分の自分が馬鹿らしくなってきた。相対して率直な美沙さんが、もっと好きになった。「さ、次の講義始まつちゃうよ。行こう？」

踵を返した彼女の腕を引き戻した。自然と。本能のように。

「今度は僕のほうからだよ」

美沙さんの唇に、思いのたけと共に唇を重ねた。彼女は驚いた様子だったが、やがて僕の背中に手を回して身を委ねてきた。僕も強く抱きしめた。だけど、この幸福な時間は、もうすこし後にとつておこつか、なんて、今までの自分とは驚くほど違う考えに、自分で驚きながら、交差する腕をほどいた。うっとりした彼女の瞳は艶っぽく、とても綺麗だった。

「嬉しいわ。嬉しいよ、俊也くん。でも」

二人、見つめあう。僕は今の心境を言葉にできず、彼女の言葉を待った。暖かい、愛情のこもった言葉を。

「次の講義、別館よ。俊也くん、100メートルを十秒以内で走れる？」

とたんに現実へ引き戻された。時計をみると、開講の二分前。

「やば！行くよ、美沙さん」

美沙さんの手を引いて走り出すと、また可笑しくなってきた。笑いながら走る二人の男女。他人がみたら怪訝な顔をするだろう。途中、美沙さんは僕に言った。

「ねえ、美沙って呼んでよ。私も俊也、って呼ぶから」

「ああ、僕もそう思っていた。これからもよろしく、美沙」

「大事にしてよね、俊也」

かくして一組のカップルは誕生し、廊下での公然キスはしばらく
校内の話題にされたとき。もちろん講義には五分遅刻。講師にお小
言をいただいたのは言うまでもない。

交際

めまぐるしく生活が変化してゆく。ダムが決壊したみたいに、僕の心の中のきれいな部分も、汚い部分も、すべてが見届けるまもなく、いくらいのはやさで流れていった。そして、過去の遺物が流れ去ったあとに、美沙が残った。だからといって、医師を目指す向上心は保っている、いや、美沙の存在が後押しして拡大されている感すらある。

「おおげさだな、僕」

ぼろり、と口からこぼれだす言葉。感情はねじまげることない素直なものだが、どうも僕は哲学的になりすぎていると、自分で思う。「なにが？」

フイに、隣席の美沙が聞き返した。現実に戻って見渡すと、いつもどおりの講義風景だ。ダムを決壊させた張本人は、悪びれることなく、小首をかしげて僕を見つめていた。

「な、なんでもないよ。独り言」

美沙という存在が、僕の中でランクアップされ、恋人なのだと認識すると、小恥ずかしくてむずがゆいものが走った。美沙本人は、いまのところ、それまでの美沙と別段変わった様子もないが。

「ねえ、美沙さん」

「こら、さん付け禁止」

「あ、ごめん」

初手からこんな調子では、後先思いやられるな。きっとまだ僕の中には女々しい、後ろ向きな部分があるのだろう。そこから改善していかなければ、美沙とうまく付き合えそうにない。

「僕ってさ、なんていうか、女性をリードする力が足りないって言うか……」

そこで僕が言葉を詰まらせると、美沙はきよとんとした表情を見せ、すぐになにか閃いたようににやけ顔をした。

「へえ、自分を変えたい、みたいなの？」

先を読まれている。まあ、美沙からすれば、僕ほどわかりやすい男はいないのかもしれない。

「大丈夫よ。そこまで自分を客観的に見られているんだったら、あとは努力あるのみよ。大人としての付き合いは年上の私に任せてくれればいい。『男』っていう部分：自分が思い描いている男性像みたいなものは、俊也次第ね」

こちらには一瞥もくれず、黒板の文字をものすごい速度でノートに書き写しながら美沙は言った。ズバリ、そのとおり。何も教えられなくてもそれくらいのことにはわかっている。相手から影響されて変わる部分もあるけれど、芯の部分は自分以外踏み込めはしない。今がその時で、美沙との交際がきっかけなんだ。

「ありがとう。モヤモヤしたものがすっきりしたよ。努力、してみるよ」

そういうと、美沙はチラ、とこちらを見て微笑んだ。右手だけがほかの生物として独立しているように、ノートを文字で埋め続けている。

講義が終わると、いつものメンバーが集まってきた。僕は参考書をしまいかけていたが、美沙はまだ何かノートに書き続けている。すると加奈ちゃんが、美沙を一瞥して、僕の耳元でささやいた。

「ねえ、美沙さんと、ドコまでいったの？」

美沙に聞かれていやしないだろうかと焦った。幸い気づいてはいない様子だ。

「ドコまでって、ドコのことだよ？」

同じく小声で返す。すると加奈ちゃんは少し呆れ顔で僕をにらんだ。

「相手は年上なのよ？あんなコトやこんなコト、いろいろあるでしょ」
「ようが」

加奈ちゃんの聞きたいことはわかっている。だけど、さして特筆

するようなことはありはしない。

「キス、しただけだよ」

視線を逸らしてそれだけ言うと、加奈ちゃんは「それは知ってる」と答えたまま不機嫌そうだ。

「あなたたちの『公然接吻事件』を知らない者なんて、ここにはいないの。私の興味は、そこから先のこと」

「そんなこと聞いてどうするんだよ」

今度は僕が不機嫌になつてきた。

「どうもしないわよ。ただ、大人な女性はどうやって男を手玉にするのかなあ、とおもっただけ」

「つまり、美沙を参考にして男を手玉に取るうってこと？」

キツ、と加奈ちゃんの鋭い視線が向けられた。かとおもつと、途端ににやけ顔を見せて、「美沙、だって」とつぶやいてクスクスと笑い出した。もう、これ以上は何も聞かないだろう。加奈ちゃんの中では、ある程度僕と美沙の関係図が構築されたようだ。

「なあ、秋山。今夜飲みにいこうぜ？」

割り込んできたのは児島だ。持田さんの肩になれなれしく腕をかけている。一つ年上の持田さんには、まるで嫌気はない様子だ。

「おいおい、僕たちはまだ未成年だぞ」

「わかってるって。未成年組は飲酒禁止。飲んでもらうのは美沙さんと持田さんだよ」

「持田さんって、まだ十九歳じゃなかったっけ？」

そう訊ねると、児島がなぜか自慢げな顔をして、

「今日は、持田さんの二十回目の誕生日なんだよ。つまり、飲酒解禁祝いつてところだ」

そのとき、美沙が書き取りを終えたようで、スツと立ち上がった。「それはめでたいねえ。酒の相手ができたってことは私にとって嬉しいかぎりだよ」

あんなに真剣に書き取りをしていたとおもったら、こちらの話はちやっかり聞いていた。すでに飲む気満々のようだ、とわかったの

は僕だけかもしれない。

結局、数分後には『飲酒解禁祝い』の手はずは取りまとめられ、それぞれ一度帰宅してから現地集合ということになった。帰る方向が同じである僕と美沙以外、皆ちりぢりに校門を出て行った。

「ねえ、俊也。帰宅して着替えたら、すぐお店に行かないで私を迎えにきてくれない?」

「ああ、いいけど」

美沙のお願いの意図は図りかねたが、二人で腕を組んで行って、皆に見せ付けるのもいいかもしれない。あらためて交際宣言だなんて、僕の口からは出てきそうにもないのだから。

帰宅後、すぐにシャワーを浴びて着替えを済ませた。形式ばった飲み会でもあるまいし、あくまで軽装だから、数分あれば完了してしまう作業だ。集合時間までには、まだ少し時間があるし、さて、どうやって時間を使おうか、と考えているところに、携帯電話が鳴り出した。相手は美沙だった。

「もしもし?」

「俊也?もう支度は済んだ?」

「ああ。男はそんなに身支度に時間がかからないからね」

「じゃあちょうどいいわ。ちょっと早いけど、私の部屋まで来てくれない?何を着ていこうか迷っちゃって、俊也に選んでほしいの」

「僕、そんなにファッションセンスないよ」

戸惑いながらそう答えると、

「センスとかウチワとか、そんなのはいいの。俊也が着てほしい、とおもった服を着て行きたいの」

オヤジギャグを交えながらも、真面目に言われるとこちらも了承せざるをえない。わかった、すぐいく、と答えて携帯電話をしまった。あとは財布をポケットに突っ込んで、母に夕食はいらない、とだけ言っただけで玄関を出た。

電車で二駅、徒歩十分で、美沙のマンションに到着。ベルを鳴らすと、中から慌しく走ってくる足音がひびいた。

「はやかっただね、ありがと」

それだけ言うと、僕の腕を引っ張って部屋に連れ込む。僕はされるがままだ。

部屋の中は、ところせましと様々な洋服が並べられている。さしずめ洋服店の閉店叩き売りセールのようだ。

「ねえ、どれがいい？」

「ちよっと待ってよ。急に言われたって…」

そう言っただけで部屋を見渡していると、美沙が少し不機嫌そうに、

「私は俊也のイメージに合わせるから、好みを教えてよ。服は全部お気に入りのやつばかりなんだから、あとは俊也のイメージ次第なの」

それはそれで困る。むしろ、これ、と指をさすだけのほうが楽だ。僕は考え込んでしまった。適当に言っただけのいい美沙が膨れっ面するだろうし、ここは真剣に答えよう。

「えーと、なんていえばいいのかな。清楚で、清潔な感じで…」

「じゃあ色は白かな。それで？」

「それで…地味すぎない、派手すぎない…」

「うんうん」

「堅苦しいことのない、ラフな感じの…」

「…」

なぜか美沙が黙ってしまった。僕としては真面目に言っているつもりなのだが、なにか気に入らないらしい。

「あのさ…美沙なら何着ても似合うとおもっし…そんなにがんばらなくても…」

と、僕の言葉が、ついに美沙の導火線に火をつけてしまった。スツと立ち上がったかとおもつと、隣室に入って勢いよくボタンツ、と閉められてしまった。

「ごめん、本当に女性の服がよくわからないし、ほんと、ごめん」

謝ったって、わからないものはしょうがない。それに、何を着ても似合うとおもったのは本心だ。それでも何かを求めるのが女という生き物なのだろうか。

しばらく静かな時間が流れたが、ほどなくして隣室でもぞもぞと動く音がした。どうやら着替えているらしい。それもほんの数分のこと、二人の間に阻んでいたドアが静かに開かれた。見ると、白いＴシャツにローライズ。ピアスもリングも着けていない、実にさっぱりした姿になっていた。

「俊也の好みを要約したら、こうなった」

「まだ少し不機嫌そうにポーズをとった。」

「あ、ああ。さっぱりしてて、似合うよ。うん、似合ってる」

僕が手を叩いても、膨れっ面は解除されない。固まりかけた空気の中、緊迫を解いたのは美沙のほうだった。なにか思いついたらしい。ニヤリと不適な笑みを浮かべて、また隣室にこもった。

ドアが開いたのは、最初にＴシャツとローライズで現れたときとかわらない時間だった。

「これでどう？」

そう言われて、まじまじと美沙の身体を眺める。Ｔシャツにローライズ。

「ど、どこが変わった…のかな…ええと…あっ」

僕は気づいてしまった。僕が絶句していると、美沙は次々とセクシーポーズをとる。360度、クルリと回ってみせると、さらに驚愕の事実…いわゆる『ノーパンノーブラ』だ。Ｔシャツからは乳頭が透けて見える。後ろを見るとお尻の四分の一ほどが出てしまっている。僕は言葉を発することもできなかった。

「俊也の好みに、すこしセクシーさを足してみましたー」

「少しどころじゃない。こんな格好で歩かせたら、男なら100%ニヤケ面して見とれるだろう。僕は断固反対した。」

「だめだよ！こんな格好で歩いたら…と、とにかくちゃんと考えるから、もうちょっと待って…」

「残念でしたー。時間切れです。時計見てみてよ」

われに返って携帯電話で時刻を確認する。集合時間の二十分前だ。「やば！ー」といって美沙にこんな格好させてたら、みんななんて言うか…」

僕がパニックになっても、美沙は冷静なまま、バッグを抱えて僕の腕にからみついた。Ｔシャツごしに美沙の乳房の感触が伝わる。僕はパニックのまま、腕を引かれて美沙の部屋をあとにする…。

このあと、集合場所に到着するまで、何人の酔っ払いオヤジ達に冷やかし声をかけられたか…言う気力もない…。

加奈の告白

案の定、仲間たちの反応も想像通り。視線は逸らすわ、会話は続かないわで、僕は必死に話題を振って美沙の工口オーラを押さえ込んだ。加奈ちゃんは大学生らしく、かといって堅苦しく見えないスタイルだ。こういう衣装は、美沙はとても持っていないさそうだ。

持田さんと美沙のボルテージが高まると、僕と加奈ちゃんはまず居づらい状況で、二人してウーロン茶を飲みながら静観していた。児島はノリが売りだから、うまく酔っ払い二人を担ぎ上げて調子に乗せていた。

「あのさ、秋山君」

聞き逃しそうなほど小さな声で、加奈ちゃんが呼んだ。

「なに？」

聞き返すと、加奈ちゃんはドンチャン騒ぎを一瞥してから、「ここじゃ、ちよつと」と言うなり席を立った。ここでは言えない何かがあるのだろう。

「ちよつとお手洗い。僕と、加奈ちゃん」

そう言っただけ席を立った。三人組は僕の声が聞こえてないのか、騒ぎの渦中に酔いしれていた。

「ここなら大丈夫だな。加奈ちゃん、話はなにかな？」

店の外に出ていると、中の騒ぎが嘘のように静かで落ち着くことができた。加奈ちゃんは少し躊躇いながら、ポツポツと言葉を発した。「私、みんなと居る時間はとても楽しいわ。秋山君と美沙さんも、お似合いのカップルだし、持田さんも児島君も楽しいし。ずっとこんな風にいられたらなあ、って思うの」

悩み事でもあるのかと思っていた僕には、彼女が吐露した胸のうちから、意図するところを測りかねた。

「少なくとも、卒業するまではみんな一緒だよ。医師になったあと

だって、友達でいられるよ、きっと」

僕は探るように答えた。でも加奈ちゃんは小さく首を振って瞳を潤ませた。

「どうしたの？なにがあったの？」

「あのね」

ポケットから取り出したハンカチで涙をぬぐいながら、のどを詰まらせて胸のうちの語りだした。曰く、美沙が複数の男と接触しているのだという。それも、どの男に対しても情愛に繋がれた雰囲気が見て取れたのだという。

「私、秋山君のこと好きだった。いいえ、まだ好きなの。その人の彼女が浮気している場面を何度も見てしまった私の気持ち、わかる？美沙さんがしていることは、秋山君の存在を冒涇することだわ。」

私が美沙さんになわかない女だということはわかってる。あらゆる面であの人はすごいとおもうし、秋山君だって、そういう美沙さんが好きなのよね？」

加奈ちゃんの気持ちに継ぐ言葉が、どうしても見つからない。美沙が浮気？それも複数の男と？僕が当惑していると、加奈ちゃんは言葉を継いだ。

「ごめんなさい。こんなこと言っちゃって秋山君を困らせるだけだよ。でも、美沙さんがどうこうということより、私の気持ちは伝えたかったから…。私の勘違いということもあるかもしれないし、美沙さんが他の男の人と、っていうのは忘れて。二人の間に亀裂ができてしまったら、私はとんでもない罪を作ったことになるね。ごめんなさい」

自分が言った告発が、もしかしたらとんでもない内容だったかもしれない、と後悔したのか、加奈ちゃんの口から継がれる言葉はギクシャクして芯が抜けてしまっている。僕も頭の中を整理するのに時間がほしいところだ。

「ごめんね、秋山君、私、これから教会に行ってくる。みんなには少し具合が悪くなったから帰っちゃって伝えてくれないかな。せつか

くのお祝いなのにごめんねって、持田さんには「

「教会つて…？」と聞き返そうとしたが、ふと『懺悔』という言葉が浮かんで口をつぐんだ。今の加奈ちゃんは罪に苛まれていたたまれないのだ。とても席に戻れる気分ではないだろう。

後姿を見送ると、外の空気をいっぱい吸い込んで、頭の整理をはじめた。美沙が他の男と歩いている。それは僕にとってさほど驚くことではなかった。アルバイトをいくつも掛け持ちしてるから、知り合いも多いだろうし、加奈ちゃんが『浮気』と表現した行動がどういうものかも定かではない。僕に好意を抱いていた加奈ちゃんなら、ただ街中で男と談笑して歩いているだけでも、浮気だと受け取るとも考えられる。それに、僕たちは正式に交際をはじめてからまだ時間が浅い。加奈ちゃんがそういう美沙を目撃した日時と、僕たちが交際をはじめた日時が交錯しているかもしれない。つまり、僕と付き合う直前まで他に交際相手がいるかもしれない。加奈ちゃんが勘違いを起しているのかもしれない。とにかく僕には美沙が浮気できるような女だと思えなかった。うまく男を操るようできて、それほど協調性と器用さは持ち合わせていない。それが美沙だ。なにより付き合い始めたばかりの彼女を疑うことはできなかった。加奈ちゃんの言葉は忘れよう。これからまだ楽しいことがあるにきまっている。心が定まったところで、もう一度深呼吸すると、店のドアを開けた。喧騒が外にあふれ、外の静寂の臨場感を感じた。

欲望の頂

思索しながら店内に戻ると、美沙が玄関前に立っていた。美沙は怪訝そうに僕の顔を見た。

「どうしたの？加奈ちゃん、具合悪いの？」

僕はとっさに視線を逸らしてしまった。そしてそれを一瞬に後悔した。美沙は勘が鋭い。必ずなにか違和感を感じているにちがいない。

「なにかあったの？」

美沙の目は真剣で、酔っ払いのそれを感じさせない。でも僕には、加奈ちゃんの告白の内容をさらけだす勇気もない。美沙を責めたてて事実を追及する気もなかった。

「ああ、うん。体調が悪いから帰るって。送るって言ったんだけど、一人で帰れるって」

なにか自分が悪いことをしたかのように、言い訳がましく説明した。そんな僕の顔を、まじまじと美沙が見つめた。

「俊也の目」

「え？僕の目？」

言われて、慌てて目をこすった。美沙は表情を変えない。じつと僕に視線を合わせ続けている。

「俊也の目。今まで私に見せたことない目だわ」

低いトーンで、冷たく、呟いた。その表情を見つめると、背筋に冷たいものが走った。

「とにかく席に戻ろう。他の二人にも、ちゃんと説明しないと。だる、美沙」

とにかくこの場をしのぐと言葉をかけた。しばらくすると、美沙の意識が遠くから戻ったように瞳の光を取り戻した。

「そうね。戻って飲みなおそっと」

いつもの明るいトーンが戻り、僕は安堵した。

詳細な説明は必要ない。加奈ちゃんは体調の不調を訴え、帰宅した。ほかのみんなに謝っておいて、と言い残して。

美沙は何事もなかったように、ビールジョッキをあおいでいるが、持田さんと児島は、あきらかに興醒めしているようだ。無理もない綺麗どころが一人減るのは、興に水を差すとても大きな要因となりうる。僕はなんとか取り繕うかとおもったが、ただでさえ人付き合いの苦手な僕にここでイニシアチブを投げ渡されても、何の業も持ち合わせていない。次第に空気は『解散』に向かう様相を見せた。

『解散』の時間は、ほどなく訪れた。それなりに楽しい会ではあったのだけれど、少しみんな不完全燃焼な表情を隠せないでいる。児島は泥酔した持田さんをかかえ、駅に向かって歩き出した。僕は介抱しようとしたのだが、児島がそれを拒んだ。「俺だって医者のお卵なんだぜ」と言い残して。あとで思えば、僕と美沙を二人きりにするよう。気を回したのかもしれない。そういう気遣いは人一倍なのだ。

「私たちも帰りましょう」

児島たちとは別の駅のほうへ向いて、美沙が歩き出した。足元はトランポリンの台の上を歩いているようにフワフワしている。千鳥足、という言葉があるが、おそらくこういう状態を言うのだろう。僕はすぐに美沙を抱えるようにして歩き出した。

「飲みすぎだよ、美沙」

たしなめようとそう言うと、ギロリと怖い表情が返ってきた。美沙はパツチリと大きな眼をもっているから、こういう表情も迫力がある。僕は思わず顔を逸らした。

「じゃあ、介抱してよ」

「言われなかったって、そうするつもりだよ。だからせめて、自分の部屋に着くまで、大人しくしてくれよな」

前にもこんなことがあったような、と一瞬思ったが、状況はそん

なことに気をかけていられないのだ。美沙は睡魔に襲われているとみて、足元はおぼつかないし、僕にかかってくる荷重がじわじわと大きくなってきた。がら空きの電車に乗って座席に寝かせると、ようやく少し安堵できた。

大変だったのは美沙のマンションに到着してからだった。引きずるようにエレベーターに乗ると明らかに吐き気をもよおしている表情をじだした。こんなところで勘弁してくれよ、と背中をさすったが逆効果だったか、切羽詰った状況に。ドアが開くと同時に美沙は走り出した。自分の部屋の鍵を開け、トイレに走りこんだときの速さは、今まで見たこともない「新記録」級だった。

僕は美沙の部屋に入り、一息ついた。美沙はまだトイレから出てこない。アルコールを処理するには大量の水が必要だ。冷蔵庫を勝手に開けてみる。幸いミネラルウォーターのペットボトルが入っている。あとはなにかいい薬があればいいのだが、それは部屋主にきいてみなければわからない。ペットボトルを取り出すと、テーブルに置いてあったグラスで、僕も一杯のませてもらった。

「うう…」うめき声が聞こえて振り向くと、キッチンの壁ぎわで美沙がしゃがんでいた。

「大丈夫か？ほら、水」

グラスを手渡すと、ゴクゴクと音を立てて飲み干した。

「胃薬かなにかないか？吐き気くらいには効くとおもっんだ」

「胃薬いゝ？ないよ、そんなの」

そう言うと美沙は立ち上がり、ベッドのほうへ足をひきずるように歩き出した。

「もう寝るかい？もう少し水分摂ってからのほうがいいよ」
もう一度グラスを手渡すと、素直に飲んだ。

「ふう」アルコールまじりの息を吹き、自分のベッドに倒れこんだ。このまま眠ってくればむしろ安心だ。さいわい部屋はさほど寒くないし、このまま眠ってしまっても風邪をひくことはないだろう。

これなら安心できる。僕も自分の疲れをすこし回復させようと、美

沙の寝顔を見ながら胡坐をかいた。頬に赤みが差した表情は色つぱくって見入ってしまうほどだ。このままずっと見ていたい。そんな気分させる。美沙には随分振り回されているのだけれど、なぜだか悪い気がしない。恋人だから、とかじゃない。もつと深い感情があるのだからけれど、僕自身、それを見つけ出すに至れない。また、それを必要ともしない。ただ、一緒にいらればいい。今は、それでいい。

「俊也？？いる？」

寝言か？そう思って顔を近づけてみると、美沙は大きな瞳を開けていた。潤んだ瞳に。紅を差す頬。思わず生唾を飲み込んだ。僕だって健全な男だし、こういうシチュエーションには多少なりと憧れがあるものであって…。

「俊也、また自分に言い訳してるでしょ」

凶星だった。僕は自分の弱さに言い訳をかこつけようとしている。

「素直になりなよ。私は全部受け止めてあげるから」

その言葉が僕の心の呪縛のようなものを切り裂いた。まるで獣のように、美沙の身体を求めた。美沙は言葉どおり僕をうけ入れてくれるようだった。唇を重ね、甘い香りのする口内を舌でかき回した。

僕は貪欲の虜になり、自分のしらない美沙を求めた。比類なく美しい乳房を揉み、全身を愛撫した。美沙も僕のポルテージに合わせ甘い声を発しだした。ひきちぎるように下着を奪い、下肢に手を這わせ、女性の象徴を愉しんだ。甘美な芳香を吸い込み、一番敏感なはずの部分を舐めあげてやる。美沙の声が小鳥のさえずりに聞こえる。僕の身体はもうとつくに美沙とひとつになる準備ができあがっている。あとはタイミング…なんて余裕もない。美沙の体内に侵入を試みる。抵抗はない。こんなにスムーズなものとは想像しなかった。美沙の声色が変わる。背中をのけぞらせ、結合部分を押し当てるように抱き寄ってきた。美沙の瞳は視点を得ずうるわしく輝いていた。僕は無我夢中で頂点を目指した。あとのことなんてかまわず、ただただそのときは美沙とひとつになりたかった。

僕の記憶は著しく欠損している。唇を重ねた瞬間から、絶頂からの開放感を抱いた瞬間まで、ほとんど性器の先端にしか記憶がない。三大欲求とはよく言ったものだ。食欲、睡眠欲、そして性欲。僕は自分を客観的に見て、冷静かつ的確に行動できる人間だとおもっていた。だけど、どうだ。僕は本能のままに美沙を求め、今に至る。倫理がどうかとか、世間の風評を批判しがちだった自分が、欲求に負けたのだ。僕はただの『男』だったのだ。

美沙は僕に背を向ける格好で快樂の余韻を愉しんでいるようだ。僕はその背中をなぞり、耳元にキスをした。美沙は細かく震えていた。それは耽美の極みに派生したものであることを僕は感じ取っていた。だからなおさら、いとおしかった。だが、僕はまだ満足できなかった。下腹部の変化を、美沙の背に感じさせてやると、ゆっくりと寝返りを打ち、美沙が抱き寄った。

「うれしいよ、俊也。私の身体、こんなに求めてくれてるんだね」
美沙の手が、優しく僕の化身を包んだ。背筋に電流が走る。そしてそれと同時に僕のスイッチが切り替わった。また狂おしく抱きたくなった。だけど、美沙は冷静にそれをいなし、僕の耳元でささやいた。

「私はここにいるから、今度はゆっくりと愉しみましょう」
美沙は手に握ったものをやさしく擦りながら口元に運んだ。やがて温かい感触に包まれ、僕は小さく声を漏らしてしまった。次第に美沙の動きが激しくなる。僕にとってはまた新しい感覚だった。視覚や聴覚で想像してきたにすぎないその快樂は、僕を虜にした。いつしか美沙の動きに合わせて身をよじらせた。いつまで続くのか。いつまでも続いてほしい時間には、やはり限りがあるだろう。それでもいい。今はただ、美沙を感じていたい。小鳥のさえずりが朝焼けを運んでくる時間まで、二人は求めるものを貪った。加奈ちゃんの告白によって生まれた疑念は、いまはもう跡形もない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4379c/>

ゲノムの縛鎖

2010年10月11日04時54分発行